



PALE MOON PAINFUL

ペール・ムーン・ペインフル

17TechS - 2018
MATURE CONTENT

A decorative woodcut-style illustration of a symmetrical, ornate frame containing a central floral motif. The frame is composed of intricate, swirling lines and leaf-like patterns, creating a sense of depth and complexity. The central motif is a stylized flower or plant, rendered with fine lines and shading, giving it a three-dimensional appearance. The overall style is reminiscent of 19th-century book ornamentation or decorative arts.

[illegible]

・血主みれ人鳥X



・クラリモンドの血の蝶

・銀鍵の死せざる睡蓮

[illegible]

・蒼近衛の尖兵



・デラモルテの不止者



・女王陛下のバンシィ



・第一書記の仔犬たち



・吊花の騎士

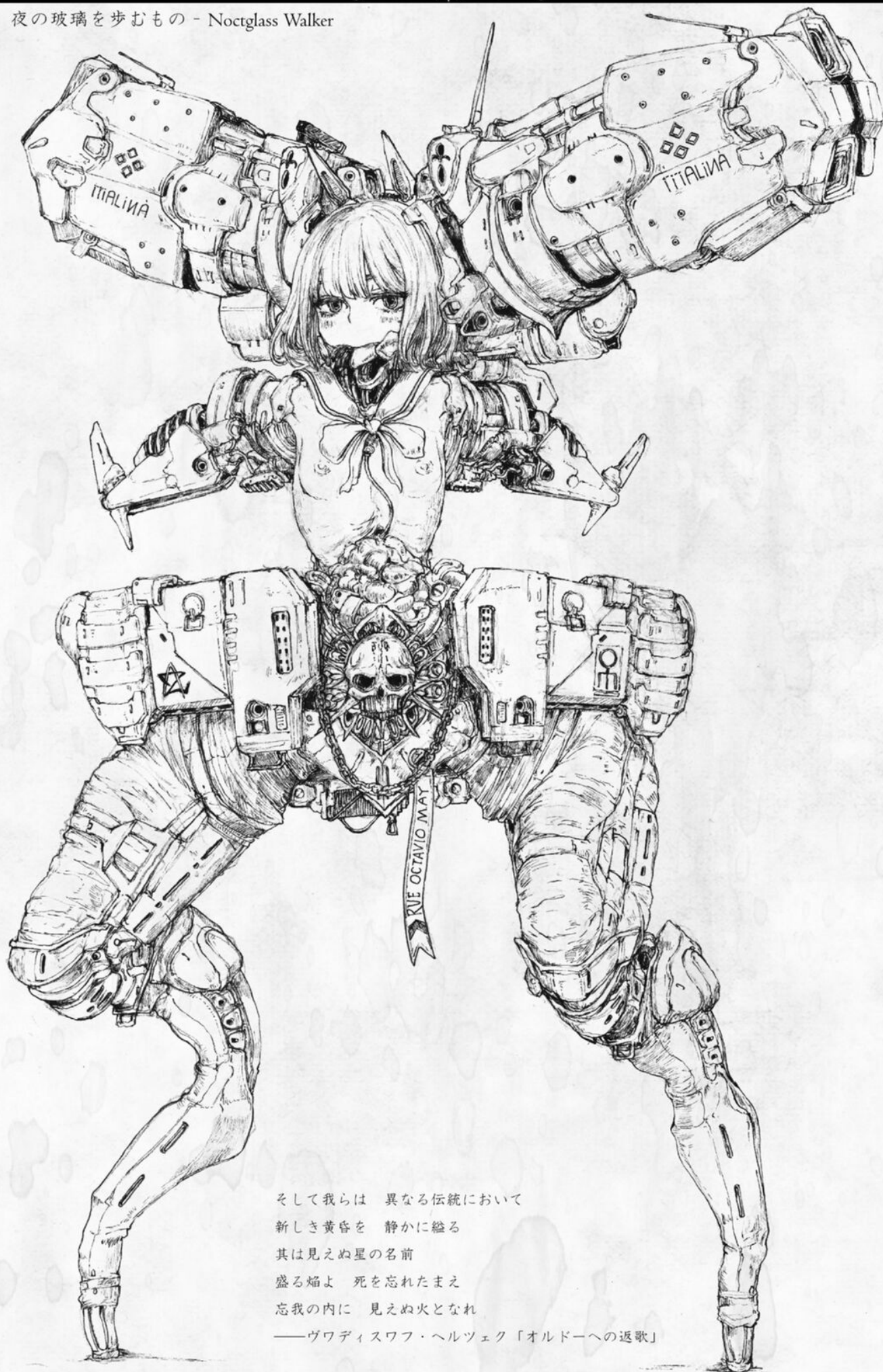
・痛みの白無垢

[illegible]

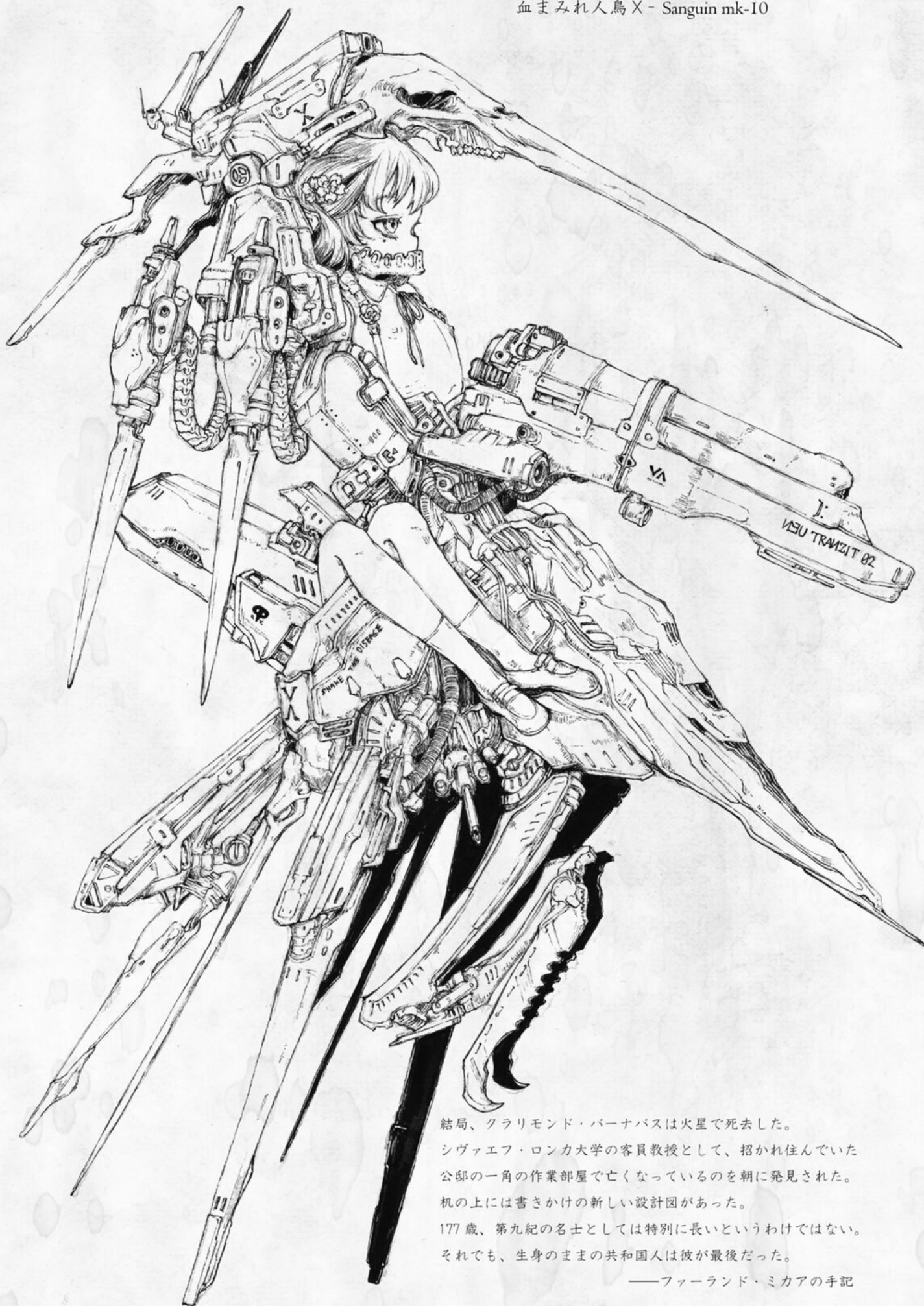
「ただ、人間でありつづけるために、自分をつねに傷つけないでいなければならないと
わかったことは、なんともいえずせつない思いをいだかせた」

——ジェフ・ヴァンダミア『全滅領域』





そして我らは 異なる伝統において
新しき黄昏を 静かに縊る
其は見えぬ星の名称
盛る焔よ 死を忘れたまえ
忘我の内に 見えぬ火となれ
——ヴワディスワフ・ヘルツェク「オルドーへの返歌」



結局、クラリモンド・バーナバスは火星で死去した。

シヴァエフ・ロンカ大学の客員教授として、招かれ住んでいた
公邸の一角の作業部屋で亡くなっているのを朝に発見された。
机の上には書きかけの新しい設計図があった。

177 歳、第九紀の名士としては特別に長いというわけではない。
それでも、生身のままの共和国人は彼が最後だった。

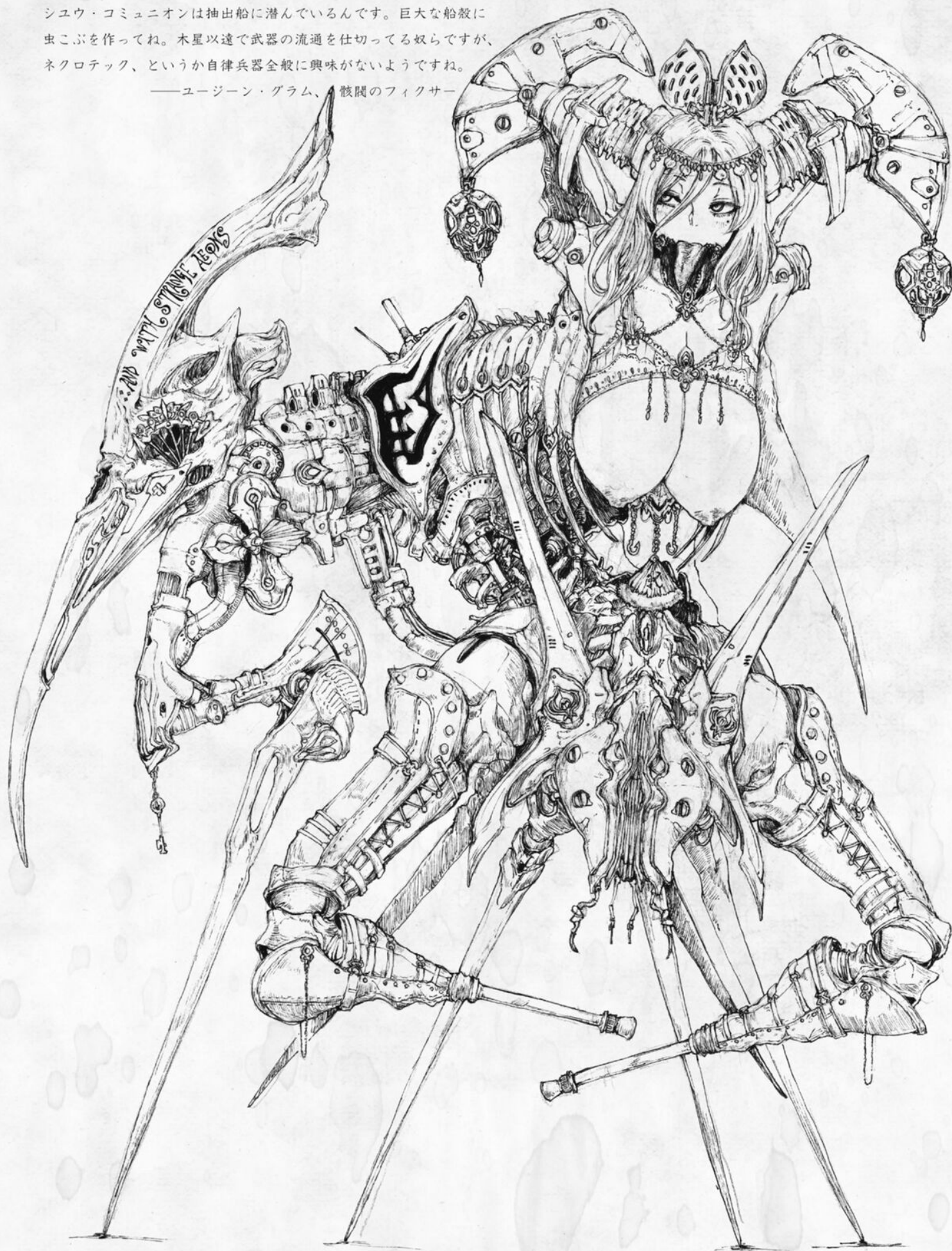
——ファーランド・ミカアの手記



大鰐通りのシェヘラザード - Scheherazade of Crocodile Street

シユウ・コミュニオンは抽出船に潜んでいるんです。巨大な船殻に虫こぶを作ってね。木星以遠で武器の流通を仕切ってる奴らですが、ネクロテック、というか自律兵器全般に興味がないようですね。

——ユージーン・グラム、骸閥のフィクサー





クラリモンド、これは本名じゃない。

彼の戸籍上の名はバルナバ・オイツェニだった。

オイツェニは“共和国”がコルボフ公国だった頃からの没落した名家で、土地の古くからの風習が多く残ってた。

男児は12歳まで女の子として育てる掟があり、

クラリモンドはその時の一時的な呼び名だったんだ。

アカデミーに入るとき、“コルボフ風”の苗字を嫌って

彼は「クラリモンド・バーナバス」を名乗った。

そしてそのままマスターに名を連ねて……

そうこうしてるうちに共和国も実家も

なくなっちゃったってわけです。

——ヤック・ハイアミオウ、

ジャーナリスト、自称歴史補完家





エンディミオン・プログラムが上手くいかないのを
私が悲しまなきゃいけないのか？利害の噛み合わない
連中同士で何とか枠組みを設立できただけマシだろう。

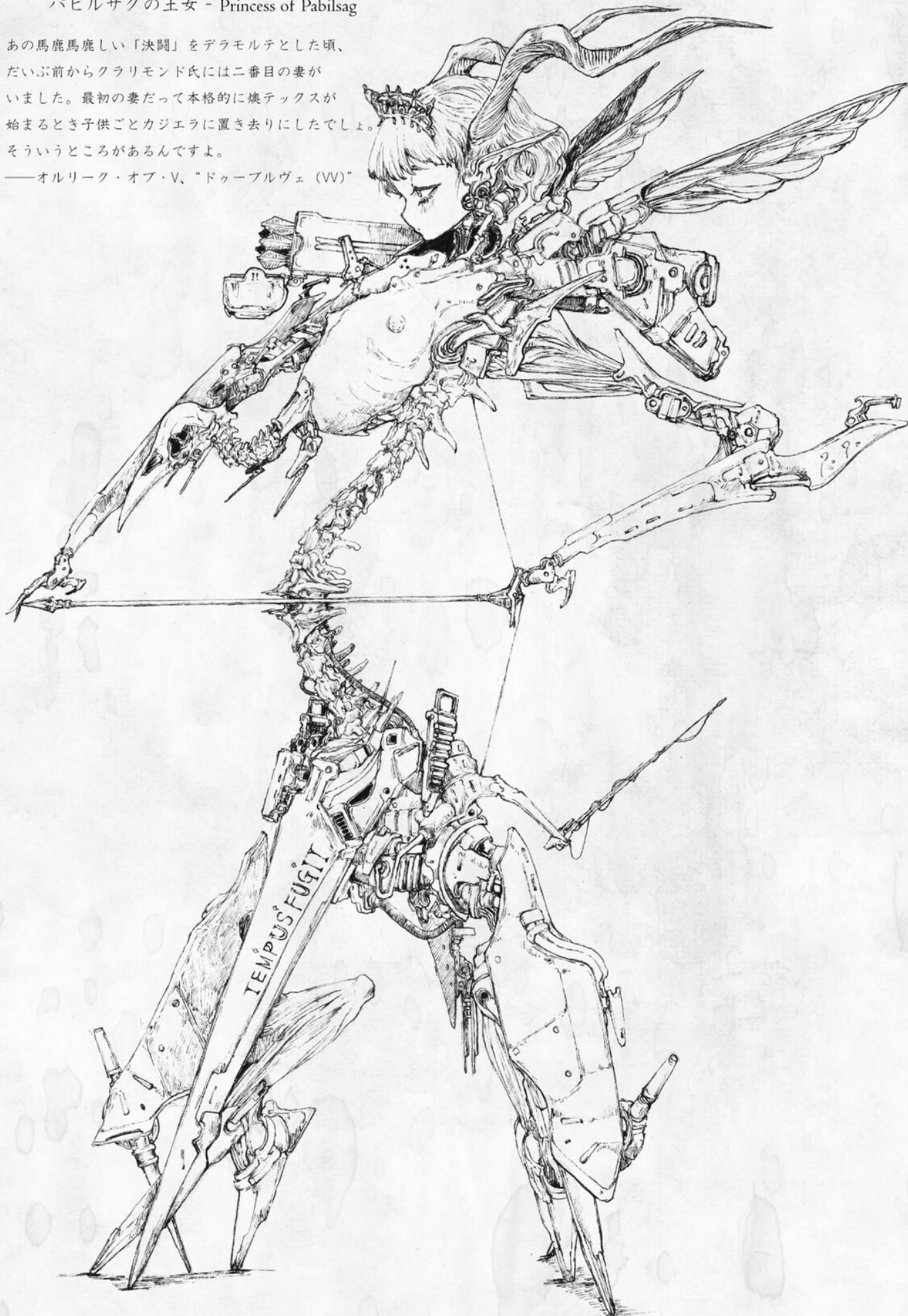
あの「合作」は実際素晴らしい出来だ、私抜きでも
やっていけるさ……ブルーノートについて
私が負う責任なんてものはないんだよ、分かってくれ。

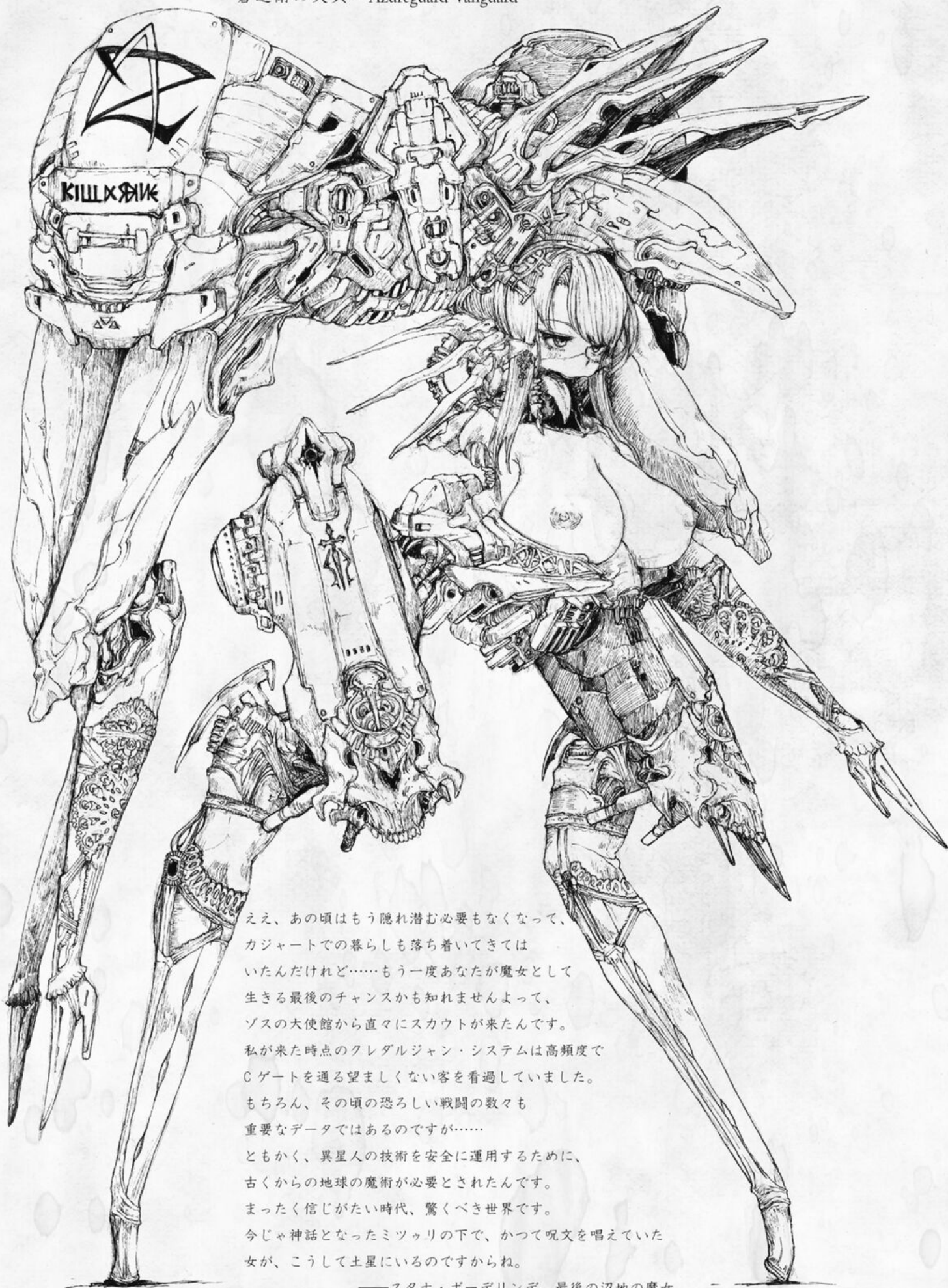
——クラリモンド・バーナバス、真円屍者技術顧問

パピルサグの王女 - Princess of Pabilsag

あの馬鹿馬鹿しい「決闘」をデラモルテとした頃、
だいぶ前からクラリモンド氏には二番目の妻が
いました。最初の妻だって本格的に煥テックスが
始まるとき子供ごとカジエラに置き去りにしたでしょ。
そういうところがあるんですよ。

——オルリーク・オブ・V、“ドゥーブルヴェ (VV)”



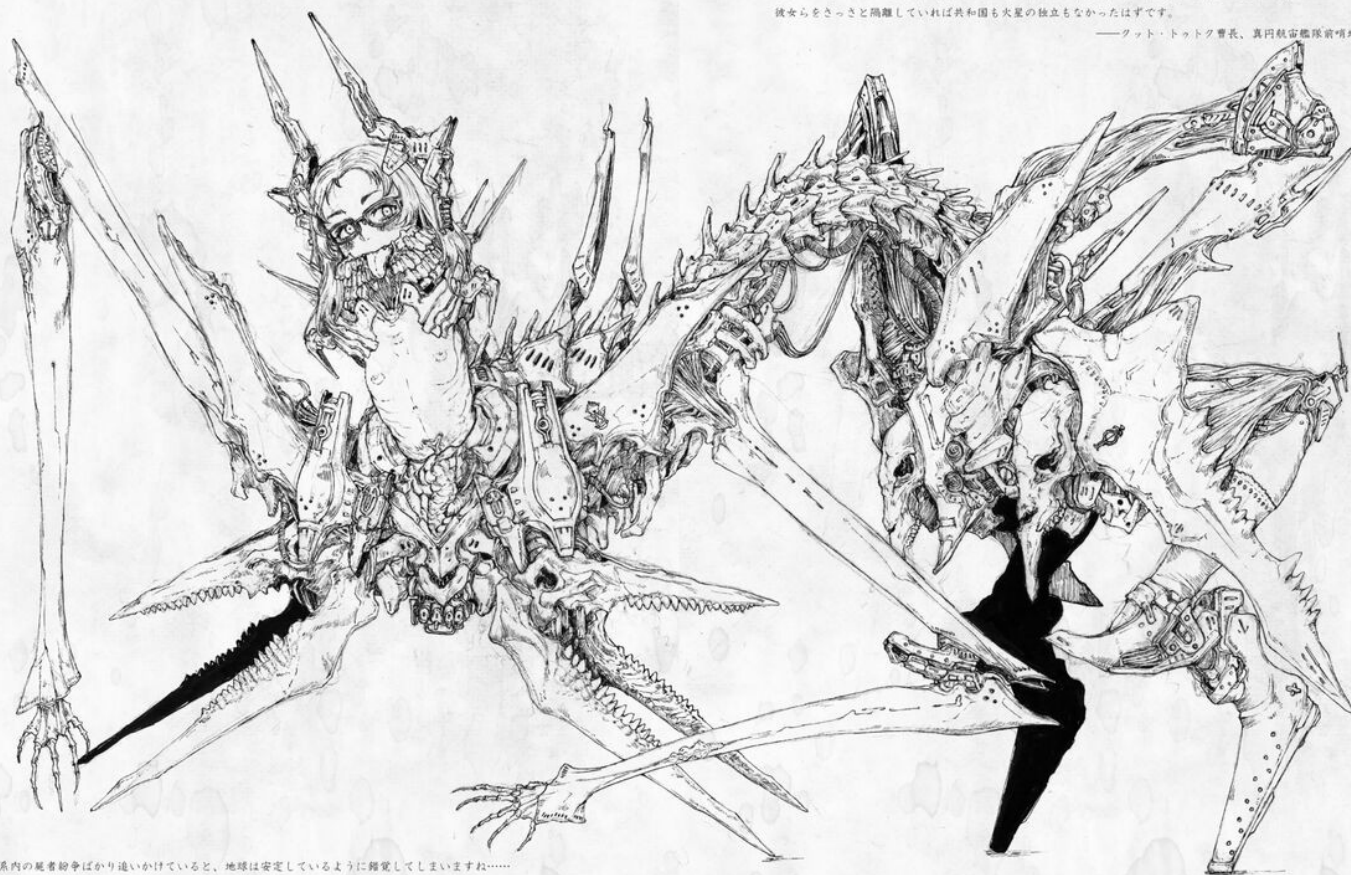


ええ、あの頃はもう隠れ潜む必要もなくなって、
カジャートでの暮らしも落ち着いてきては
いたんだけど……もう一度あなたが魔女として
生きる最後のチャンスかも知れませんよって、
ゾスの大使館から直々にスカウトが来んです。
私が来た時点のクレダルジャン・システムは高頻度で
Cゲートを通る望ましくない客を看過していました。
もちろん、その頃の恐ろしい戦闘の数々も
重要なデータではあるのですが……
とにかく、異星人の技術を安全に運用するために、
古くからの地球の魔術が必要とされたんです。
まったく信じがたい時代、驚くべき世界です。
今じゃ神話となったミツウリの下で、かつて呪文を唱えていた
女が、こうして土星にいるのですからね。

——スタナ・ボーデリンデ、最後の沼地の魔女

売日のような七姉妹帝国との小規模な交戦は、実のところ頻発しているんです。別に隠蔽されているのではなく、他の外星系勢力と一緒になってるんですよ。前回は向こうに充分分子多量体^{フル・マテリアル}がいて、こちらに戦死者が出ました。私個人の感想ですが、ゾス人の特異な複製技術で繁殖する少女だけの種族をほぼ異星人だと思えるのは仕方ないのでは？ 大望の「ミスプリント」を平気で売りさばく連中です。混沌以前^{カオス以前}の植民団に由来するといえ、彼女らをさっさと隔離していれば共和国も火星の独立もなかったはずですよ。

——グット・トットク曹長、真円軌宙艦隊前哨地の海兵



太陽系内の覇者紛争ばかり追いかけていると、地球は安定しているように錯覚してしまいますね……
ええ、バース連邦はもちろん、タラール内ですら陰謀の糸が何重にも張り巡らされているのはいつものことです。ですが今回問題になっているのは、その陰謀の背後にいるのが「第二共和国」で、しかも覇者供給路^{覇者供給路}みでセラエノの七姉妹帝国を巻き込んでいることです。リアランス：Dでナンセンス・アリス・クラブの動員を許可します。

——レイディ・サンクスミス、衆の塔理事会理事、"アガラットの黒き乙女"、観電の代表者

あの決闘の直前、デラモルテは……

実はね、太陽からかなり離れていたのよ。

「大天使」にネクロテックを教えていたと。

信じられる？あたしは最初信じなかった。

でもその後、どこか共和国の匂いがする

ネクロテックが火星辺りから新たに

現れ始めて、キブに聞いてみたら

「クリュセ・アネックスが、冥王星の

“電精”と取引をしたらしい”って。

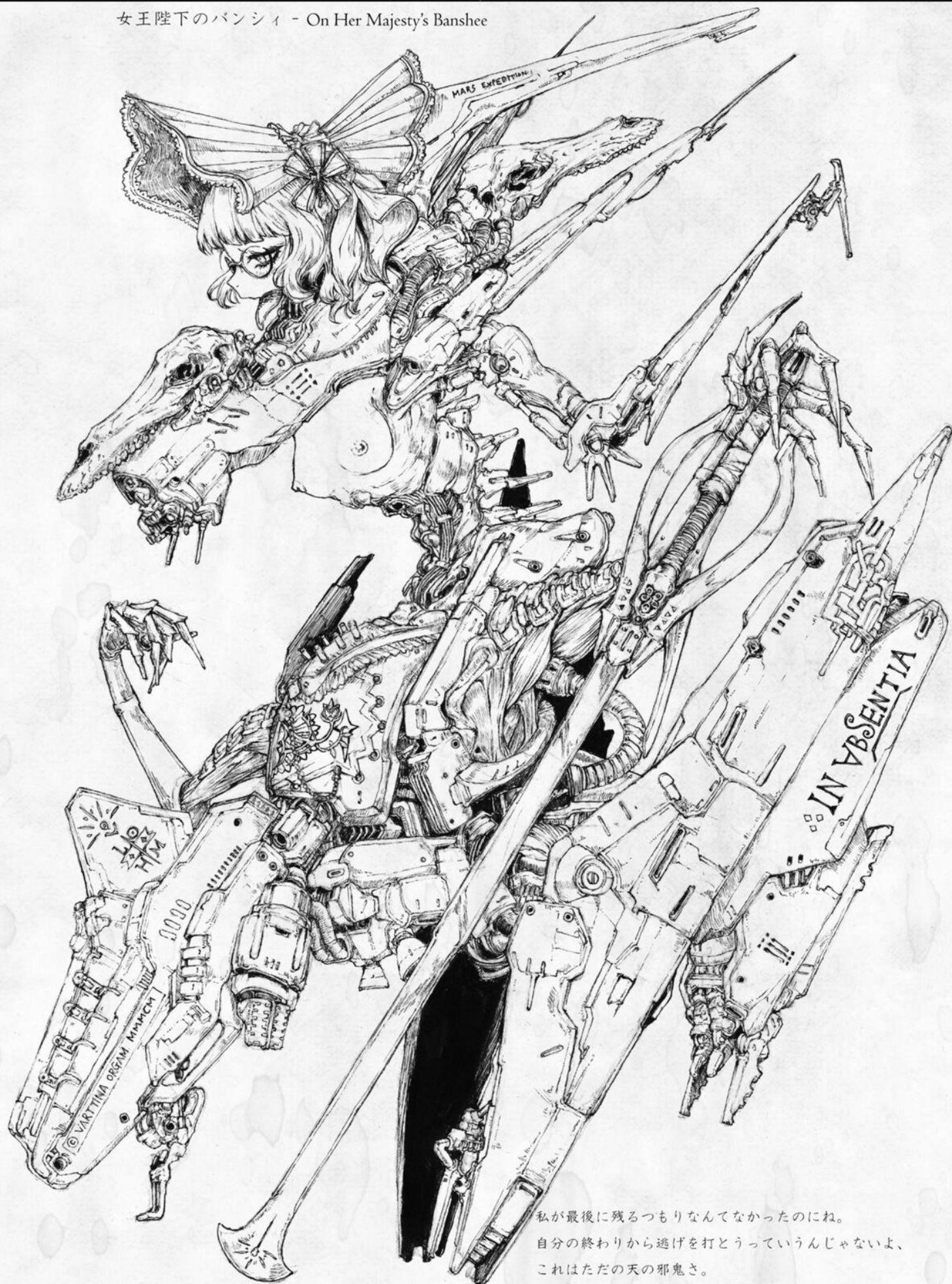
……肉体もないのに、死体のことが

分かるというの？

——ヴァレリエ・オブ・V、

“ドゥーブルヴェ (VV)”



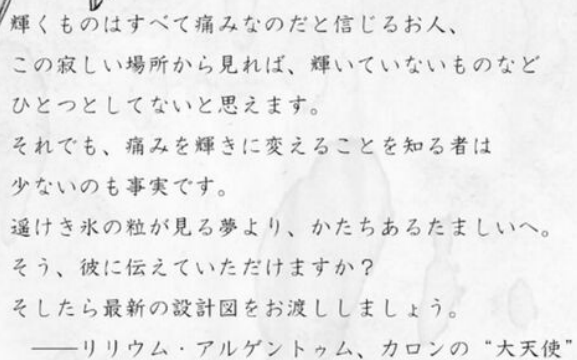


私が最後に残るつもりなんてなかったのにね。

自分の終わりから逃げを打とうっていうんじゃないよ、
これはただの天の邪鬼さ。

——カッシウス・デラモルテ、

最後のマスター・ネクロテック、“アイアンリッチ”



第一書記の仔犬たち - First Secretary's Puppies

クラリモンドを引き取って治療したのは女王代行領でした。
真円ならもっと手早く、より完璧に回復できたでしょうが、
死ななかつただけマシと思うしかない状況ではありましたね。

——アイケイシャ・シュライエル、 屍史学者

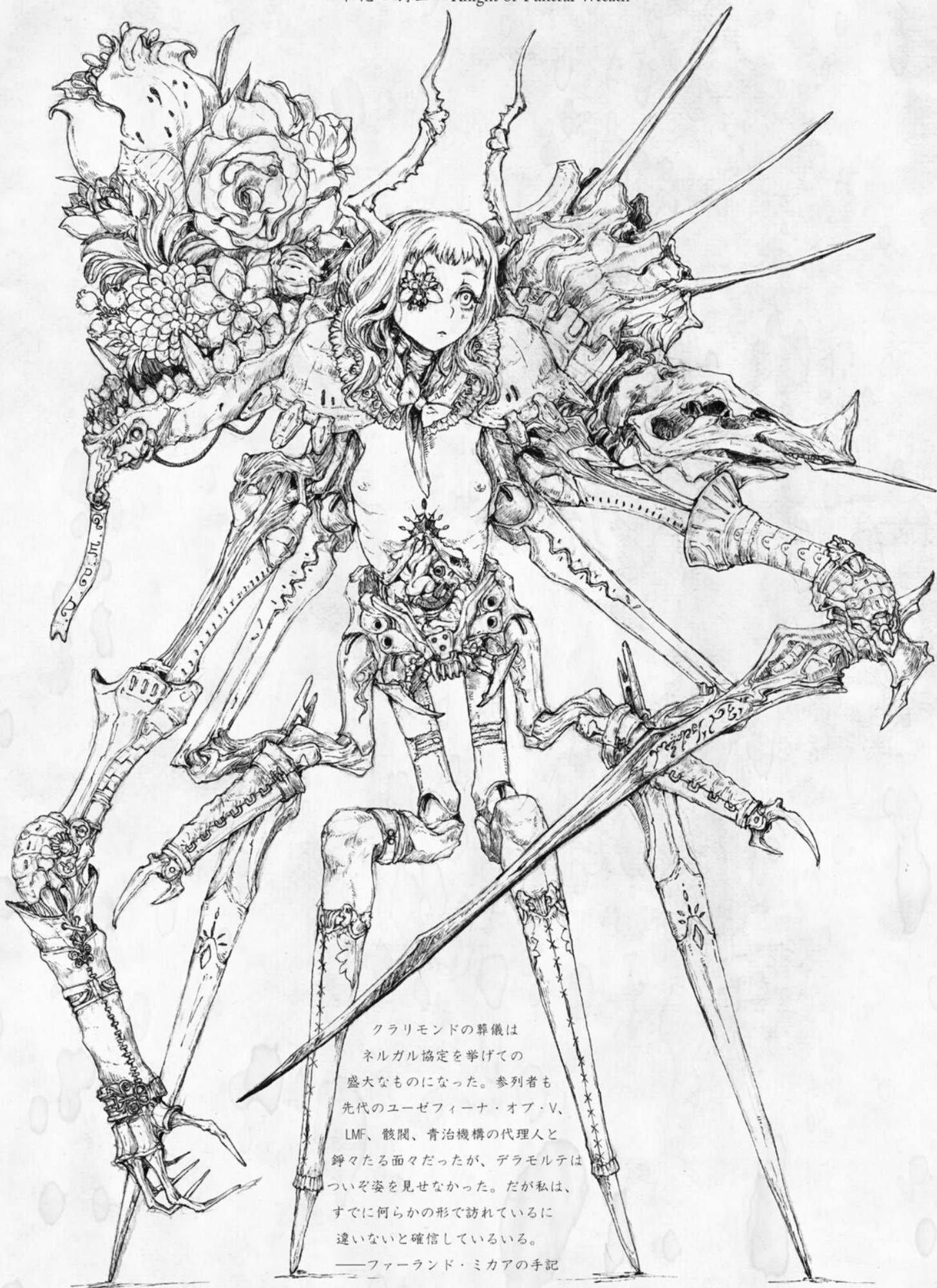




木星のコロニー群が「白薔薇」への対応に追われ徐々に限定的経済圏へと衰退していく中、同時期ゾスの資本が大量に入ってきた土星圏では、退廃的な半不死達——身体を置換した人間、血異点主義の膨張した吸血鬼、ヒトに近づきすぎたゾスの渉外種——がネクロテックを用いた危険なゲームに興じていました。

今もタイタンのクラーケンコート、それに名無し^{シタ・サン・ソム}の都は、製作や入手の経緯が怪しげな機体で溢れかえっています。

——カラス・マエジム博士、
シャイツェン・コリダーの特派員



クラリモンドの葬儀は
ネルガル協定を挙げての
盛大なものになった。参列者も
先代のユーゼフィーナ・オブ・V、
LMF、骸閥、青治機構の代理人と
錚々たる面々だったが、デラモルテは
ついぞ姿を見せなかった。だが私は、
すでに何らかの形で訪れているに
違いないと確信している。
——ファーランド・ミカアの手記



心のどこかでは分かっちゃいたんだけどな、
真円のネクロテックが、火星との戦いだけに
使われるわけないって。

——アタリィ・イルボーネン、環月の流れ者





奇妙な愛をわたしに与えてくれますか？ わたしから痛みを受け取ってくれますか？

幾度も幾度も そしてそれを今度は返してくれますか？

——Depeche Mode 「Strangelove」

ちょっと気を抜いた途端、アホくさいニュースに腹を立てたり嫌な気分になったりを繰り返すくだらない日々を送ってしまう自分に気付き、俺如きがなんか言う資格あるのか、みたいなムードが主流になってしまった昨今。自分にとって大切な痛みが分からなくなったり、あるいは思わず / 故意に痛みを忘れたりはずに済みましたが、何かが変わらなければならないという感覚だけがずんずん募ります。

ある星々がなすべきことを全うして不可避免的に終わっていくときに、あまりにもしょうもない泣き言を繰り返す、そういうひとが多数現れる光景を目にすることが最近あり、こういう苛立ちを力に変えなければならないのだと、心のどこかでわかっているのだと思い。

そのために方向を定める新しい痛みを受け入れること、それはつまるところ憧れを見つけることではないか？ 結局は、言葉に出会い直すこと、目の前のものを再発見すること、というこれまでもやってきたことを丁寧に続けていくしかないのです。願わくは我らをもう一度引きずりおろし、痛みに導く瞬間が訪れんことを。

あまりにも取り止めがなくてごめんなさい。暖かな泥濘^{breath the mire}の底より、愛を込めて。

——メグリム・ハルヨ



奥付

『ペール・ムーン・ペインフル』

2018/05/05 COMITIA124 にて発行

作者：メグリム・ハルヨ

サークル：朽techS

▽連絡先▽

haruyoi@hotmail.co.jp

pixivID:133923

twitter:megrim_haruyo

印刷所：ねこのしっぽ（有）

※過去作アーカイヴス電子版はこちら <https://deadwelders.booth.pm/items/151352>

<https://deadwelders.booth.pm/items/759437>

